

月刊

2016

1
月号

みんぱく

特集

さる



サルと人との絆 池谷和信

食べられるサル、協力するサル 五百部裕

ハヌマーン 三尾稔

一筋縄ではいかない霊長類の色覚 河村正二

変わり三猿コレクション 中牧弘允

申年を迎えて

これまでサルサルのすむ国を歩いて、三猿三猿が日本だけの言い伝えではないことがわかった。中南米にも、アジアにも、アフリカにも三猿の像があり、人々に親しまれているのだ。意味はたいてい「見ざる、聞かざる、言わざる」で、サルたちが座つてその場所を手で隠している。中には、股間を手で隠しているサルサルが加わっている四猿の像もある。

この教訓を誰に向けているかは、子ども、おとな、妊婦など場所によつて異なっているが、おおかた子どもに対して「悪いことは見ない、聞かない、言わないようにしよう」という教えであるようだ。それは悪いことは生まれつき理解できるものではなく、学習しなければならぬからである。まだ道徳観念のない未熟な子どもに悪いことを示せば、それが悪いとわからないうちに実行してしまうという戒めなのだろう。

なぜこの教えが他の動物ではなく、サルなのかと言えば、それは姿かたちや五感が人間によく似ているせいである。もうひとつ、「猿真似」という言葉がある。サルは他人のやっていることを意味もわからず真似してしまう。だから、他人のすることを参考にする前に、猿真似をせずに、じっくりその意味を考へて行動しましょうという教訓が暗示されているのかもれない。

山極 壽一

やまぎわ じゅいち
プロフィール
1952年東京生まれ。京都大学総長。理学博士。京都大学大学院理学研究科博士後期課程単位取得退学。カリソケ研究センター客員研究員、日本モンキーセンター・リサーチフェロー、京都大学畜産学類研究所助手、京都大学大学院理学研究科教授を経て現職。著書に、『京大式おもしろ勉強法』(朝日新聞出版)、『サル化する人間社会』(集英社)、『家族進化論』(東洋館出版)、『暴力はどこからきたか』(NHKブックス)などがある。

しかし、最近の研究でサルは「猿真似」ができないことがわかってきた。たしかに、サルも仲間のやっている行動を見て共感する能力はある。でも、さまざま行動を同調させるには、ひとつひとつの行動の意味と、それらの行動が組み合わさつて達成される目的を理解しなくてはならない。サルは食物をおいしく食べるなどといった目的を理解しても、それに連なる行動の組み合わせや意味は試行錯誤で習得するしかない。意味を確かめず他人の行動をコピーできるのは、人間だけに与えられた能力なのである。

だから、三猿はつい「猿真似」をしてしまいがちな人間の子どものだけに意味のある教訓なのだ。現代のIT社会では、子どもたちがつい危険な情報にアクセスしてしまいがちで、三猿の教訓は風前の灯である。情報を隠すより、むしろおとなたちが率先して悪い行いや危険なことを語つて聞かせることが必要だろう。人間の高い同調能力は、他人のやっていることに感動したり、強く共感したりする際に現れる。そのとき歯止めになるのは、文字情報ではなく、自分の信頼できる人が生きた言葉で語つた経験である。社会の価値観が多様化する昨今、一度立ち止まつて考え、他者の意見に耳を傾けることがこれまでに以上に必要になるだろう。申年まねねんを期に、真の人間らしい営みとは何かについて考へてみたいと思つた。

月刊 みんなく

1月号目次

- | | |
|---|---|
| <p>1 エッセイ 千字文
申年を迎えて
山極 壽一</p> <p>特集 さる</p> <p>2 サルと人との絆
池谷 和信</p> <p>4 食べられるサル、協力するサル
五百部 裕</p> <p>6 ハヌマーン——神になったサル
三尾 稔</p> <p>7 一筋縄ではいかない霊長類の色覚
河村 正二</p> <p>9 変わり三猿コレクション
中牧 弘允</p> <p>10 ○○してみました世界のフィールド
「沙漠の船」の乗り心地
西尾 哲夫</p> | <p>12 みんなく Information</p> <p>14 味の根っこ
ムトリ
溝内 克之</p> <p>16 文化遺産おもてうら
「聖地」と「遺跡」のあいだ
——ブツダガヤーにおける寺院管理
前島 訓子</p> <p>18 音の居場所
ジェンダーを超える踊り——ナルタキ・ナタラージ
寺田 吉孝</p> <p>20 人間学のキーワード
ケア
戸田 美佳子</p> <p>21 次号予告・編集後記</p> |
|---|---|

ささる

十二支の動物のなかで、見た目も、生物学的にもいちばん人間に近いサル。「サルでもわかる」「猿知恵」といったことばにあるように、人間からは下に見られていたり、擬人化され教訓や風刺に使われたりする方で、「人ならざる」神として信仰の対象となることもある。人間はサルに何を見出し、どのような関係をもっているのか。



サルと人との絆

サルの視座

今から三〇年も前に、わたしは、宮城県の高城山で二ホンザルの群れをみる機会があった。周囲数キロメートルという小さな島ではあるが、四つの群れが息を吐き合っている。わたしは、サルたちが植物を食べているのを見て、遠くからながめながら、ゆったりとした時間が流れているのを感じた。サルの群れは、誰かが指示することもなく移動していき、わたしはそのあとを静かに追った。今思えば、このような経験から、わたしたちの大地は人類だけのものではない、生き物との共生がいかに必要であるのか

池谷 和信 いけや かずのぶ 民博 民族文化研究部

を学んだ。しかしながら、それから三〇年、わたしは人類学という分野を専攻するようになり、地球の視野からむしろ人の側に焦点を当ててサルをみてきたことになる。

人が食べるサル

人とサルとのかかわりは、まずは食べることから始まった。食べる地域は、サルが豊富に生息してきた熱帯地域である。アフリカのコンゴ川の下流域には、人口が八〇〇万人を超えるキンシャサという大都市がある。この中央市場は、アフリカの産物をまちかにみることで



市場で売られているウーリーモンキーとリスザル。リスザルはカゴのなかに入れられている(ペルー)

る興味深い場所だ。なかでも、動物のコーナーには、野生のワニ、イノシシ類、カメ類、そしてサル類が目白押しである。サル類は、丸焼きでそのまま売られているので、わかりやすい。顔の表情がリアルである。こうしたサルの状況は、南米のアマゾン川流域の都市イキトスでも同様であった。この市場にもまた、サルの丸焼きが並べられている。サルの種類こそ新世界ザルで異なるものの、住民のタンパク源となるブツシユミートという点では両者は共通している。

ただ、南米のアマゾン川流域ではサルは市場で販売している商品のみならず、サルをペットのように飼育してかわいがる文化が根付いているのが特徴でもある。しかしながら市場のサルは、あまり元気があるようにはみえない。ペットとして飼われ、最終的には食べられてしまうということを知っているのかもしれない。どちらの地域でもサルの肉は食べ物のなかではおいしいものの代表であって、肉食の需要は大きいのでそれらの供給は今後も追いつきそうにもない。



市場で売られているサルの丸焼き(コンゴ民主共和国)



ペットとして飼われているリスザル(エクアドル)

人がうやまうサル

サルと人との関係は、食に関する文化ばかりではない。ネパールの山中にはラウテとよばれる狩猟や採集の民が暮らしているが、彼らの好物はサルの肉であるという。現在、彼らの一部は、移動しながらサルを獲得するが、森林の破壊が進行しており動物資源の不足も著しいという。同時に、周囲のヒンドゥー教徒は、サル(とくに、ハヌマンラングール)を神聖な生き物とみており、食用には決してしない。このため、首都カトマンドゥのヒンドゥー寺院でも、ここにすむサルが増えすぎて観光客に近づき困っているという。

日本では、青森の下北半島以南にサルが身近にいたので温帯では珍しくサルと共存してきた地域が多い。日本の伝統的な猟師として知られるマタギは、おもに東北地方で活躍してきたが、サルはあまり好まなかった。というのは、サルの容姿が人のそれと近いので、サルを殺すと孫の代までたたりが続くというのだ。現在、日

本全国ではサルの害がよく知られており、青森県の津軽地方ではリンゴ園での被害額が大きい。しかし、一頭当たり二万円近くももらえるというが、たたりを信じているのでサルを殺して人を探るのが難しい。

民博には世界中から集められた数多くの仮面があるが、その仮面のモチーフにサルの顔も使われてきた。朝鮮半島には木製の赤色仮面、アマゾン川流域にはヤシ製の仮面に加えてサルの頭骨がそのまま使われた仮面もみられる。

このように、世界の熱帯から温帯にかけて、サルと人との関係は、食料にはじまり、信仰やたりの対象といった文化的意味をもたされたりするなど、さまざまである。現在民博で開催中の年末年始展示イベント「ささる」展(二月二六日(火)まで)では、そのようなサルと人との関係をあらわす資料が多数紹介されているので、申年を迎えるにあたって、ぜひ民博にお越しいただきたい。



上: 朝鮮半島の文化展示場にあるサルの仮面。H0035143、下: サルの頭骨が使用されているブラジルの仮面。「ささる」展で展示中。H0008094

食べられるサル、協力するサル

五百部裕 梶山女学園大学教授

日本には、ニホンザル一種のみが生息している。そこでなかなか想像するのが難しいかもしれないが、サルの故郷である熱帯林では、複数の種が共存しているのが当たり前である。そのためサル同士のさまざまな関係がみられる。ここでは、そのなかでも特にユニークだと思われる関係を、申年のはじめに紹介したい。

肉を食べるサル

サルの食べ物と聞いて、皆さんはどのようなものを思い浮かべるだろう。たぶん多くの方が木の実や葉を思い出すのではないだろうか。確かに多くのサルたちは、こうした食べ物を主食にしている。しかしわたしたち人間が植物性のものだけでなく動物性のもも食べる雑食であるのと同様に、多くのサルたちは動物性のももよく食べている。そもそも霊長類は、昆虫を主食にしている食虫類とよばれる動物の仲間か



木の実を食べるニホンザル(宮崎県幸島)

ら進化してきたということもあり、昆虫や小型の無脊椎動物を食べるサルは多い。加えて、多くのサルが、哺乳類や鳥の肉を食べることが知られている。先日北アルプスに生息するニホンザルが、天然記念物のライチョウを食べることが報道された。なかでも、かなりの頻度でほぼ日常的に肉を食べているのがチンパンジーだ。

食べられるサル

ではチンパンジーの肉食対象はどのような動物なのか？人間は、直立二足歩行によって地



アカコロプスを食べるチンパンジー(左)。右のチンパンジーはレモンを食べている(タンザニア、マハラ山塊国立公園)

上をおもな生活の場としたこともあり、肉食の対象は地上性の有蹄類であることが多い。確かにサル類も狩猟採集民などの肉食対象となっているが、その割合は決して高くない。一方チンパンジーの主要な肉食対象は、同じ場所にすんでいるサル類であることが明らかになっている。言ってみれば、サルがサルを食べているのだ。なかでも、アカコロプスとよばれるサルが好んで食べられている。

なぜチンパンジーはアカコロプスを好むのか？この謎はいまだ説明されていない。体の



アカコロプスのおとなオス(タンザニア、マハラ山塊国立公園)

大きさはチンパンジーに襲われたときの逃げ方の拙さが、その理由として考えられているが、はつきりとした原因は明らかになっていない。むしろ単純に「美味しいから」好んで食べられているのかもしれない。いずれにせよ、このように極めて「敵対的」な関係がサル同士のあいだで観察されているのだ。

仲良くするサル

しかしサル同士の関係は、このように敵対的なものばかりではない。わたしがコンゴ民主共和国でチンパンジーに近縁なビッグミーチンパンジー(ボノボ)を観察していたときのことである。チンパンジーにはよく食べられているアカコロプスの単独個体のオスが近づいてきて、何日もビッグミーチンパンジーの群れの後をついて



ビッグミーチンパンジーのおとなオス(コンゴ民主共和国ウンバ)

まわることがあった。ときには、アカコロプスがビッグミーチンパンジーをグルーミング(毛づくろい)していた。この関係は、どちらかというとアカコロプスの側からの一方的な働きかけで成立していたが、それでも異なる種が近づいてきたり、グルーミングしてきたりしても拒まないというビッグミーチンパンジーの態度がこうした関係を維持する要因のひとつになっていた。正直言って、なぜアカコロプスがビッグミーチンパンジーの後を追いかけていたのかは不明だが、こうした「友好的」な関係もまた、サル同士のあいだにはみられるのである。

協力するサル

また、アフリカや南米の熱帯林では「混群」とよばれる現象も観察されている。これは、異なる種のサルたちが、あたかもひとつの群れであるかのごとく行動をとる現象である。短ければ数時間で終わってしまうこともあるが、場合によっては、何日も一緒に行動する。興味深いのは、比較的食べ物や行動パターンが似通ったサルたちが混群をつくることが多いという点である。生態学の主要な考え方のひとつに、「ニッチ(生態的地位)が近いもののあいだほど競合関係が強い」というものがある。食べ物や生活様式が似ているほど、種間の争いが激しくなるということだ。このような考え方からすると、混群を形成しているサル同士は、本来、強い競合関係をもつことになる。にもかかわらず、四六時中一緒にいるのだ。ではなぜ混群をつく



倒木上のレッドテイルモンキー(左側の2個体)とロエストモンキー(右側の2個体)。このようにアフリカの熱帯林では、異なる種が混群を形成している(ウガンダ、カリズ森林)

るのか？一緒にいることで、採食効率を上げたり、天敵から身を守りやすくなりしているのだと考えられている。競合関係にありながらもそれを超えた利益があるからこそ、互いに協力して暮らしているのだろう。

このようにサル同士のあいだには、さまざまな関係がみられる。そしてなぜこうした関係が成立しているのか、不明な点も数多くある。サルというтусでいろいろいるなことが明らかになっていると考える方も多いかもしれないが、まだまだわからないことも多いのだ。

インドには数種のサルが棲むが、どのサルもヒンドゥー教寺院では大切に扱われている。信者たちがエサを与えるのですっかり人に馴れ、大きな寺院のある界限でサルが群れをなしている光景を見るのもめずらしいことではない。

神に仕える力もち

サルがヒンドゥー教徒に愛される最大の理由は、誰もが知っている神話『ラーマヤナ』におけるサル軍の武将ハヌマーンに求められるだろう。『ラーマヤナ』の主人公ラーマ王（じつはヴィシュヌ神の化身）は、愛する妻シターをランカー島を根城とする魔王ラーヴァナに奪われる。この長大な神話の最大の山場は、ラーマ王がラーヴァナを討伐し無事シターを取り戻すところにある。ここで大活躍するのがハヌマーンだ。ラーマはシターを探す旅の途中で、



ヒマラヤからドローナギリ山を運ぶハヌマーン。(神話を描いたポスター)



町の辻のハヌマーン神。巨石に眼をうがち、持ち物や装束はスパンコールできれいに作られている。(ラージャスターン州ウダイプル市。2006年)

虐げられていたサル部族の長スグリヴァを助ける。スグリヴァに仕えていたハヌマーンはこれに感謝し、自らの部隊を率いてラーマ軍に加わる。ハヌマーンは身体の大きさを自由に変える能力をもっているため、海峡もひとまたぎ。真っ先にランカー島に渡ってシターの囚われていた場所を探し当てる。また敵軍の攻撃で瀕死の傷を負ったラーマ王の弟を救うハーブがヒマラヤ山脈にしかないと聞くと、ヒマラヤまでひと飛びし、ハーブの生える山をそのまま引き抜いて片手に持って戻るといって活躍も見せる。

危険も顧みずラーマに忠誠を尽くすハヌマーンは、自らの選んだ神への無償の帰依を説くヒンドゥー教世界において信者の手本とされる。また無類の力もちでありながら気が優しく、上記の逸話のようにどこかユーモラスなところも見せるため、子どもから大人まで幅広く愛される存在でもある。



祭礼のパレードでハヌマーンに扮装した信者。(ラージャスターン州ウダイプル市。2000年)

一筋縄ではいかない霊長類の色覚

そもそも色覚とは

色覚とは波長の違いで光を識別する感覚である。それにより同じ明るさでも五〇〇ナノメートルの光は緑、六五〇ナノメートルの光は赤というふうに区別できる。その仕組みはこうだ。目の網膜には光のセンサーとして働く細胞がある。視細胞という。視細胞にはオプシンというセンサーの実体となる物質が作られている。オプシンはすべての波長に均等に敏感なのではなく、もっとも敏感な波長を中心に徐々に鈍感になる山型の波長感受性をもつ。敏感な波長の光を受けると視細胞は強く応答し、強い電気信号を視神経に出力し脳に伝える。もっとも敏感な波長が異なる二種類以上の視細胞があると、色覚が可能になる。

同じ光に対して、違う種類のオプシンをもつ視細胞は違う強さの出力をする。視細胞の種類間の出力の比を色として感じているのだ。オプシンが二種類だと二色型、三種類だと三色型、四種類だと四色型色覚とよぶ。ヒトの三色型色覚の場合、数百万種類くらいの色を区別できるといわれている。二色型は二種類の視細胞の出力比、三色型は三種類の視細胞の出力比、四色型は四種類の視細胞の出力比を色として感じるため、数字が高いほど区別できる色の種類数は格段に増える訳である。

脊椎動物全体のなかでは中くらい

遠いカンブリア紀に脊椎動物はすでに四色型であった。それは魚類と鳥・爬虫類で四種類の色覚センサーオプシンを共有していることからわかる。色覚は浅瀬や森林のように明るさがちらちらと不規則に変動する環境で威力を発揮する。明るくても暗くても色味(出力比)は保たれるからだ。それでおそらく大陸棚の浅瀬で進化した我らのご先祖様は早くも高度な色覚を獲得したのであろう。

ときは流れて、中生代の恐竜の時代、我ら哺乳類のご先祖は二色型になっていた。二種類のオプシンを手放したのである。代わりに薄明視に特化した桿体視細胞を増量し、加えて多数の色覚視細胞がひとつの視神経に出力する方式に網膜を改造した。彼らは夜行性の小動物だったと考えられている。解像度を犠牲にして昼間の高度色覚より夜の高度ビジョンを選んだのだ。夜行性への適応だ。

さらにときは流れて恐竜絶滅後の新生代に霊長類は視覚装置のさまざまな改造をおこなっている。顔面が平たくなりふたつの眼球が正面を向いた。これにより両眼の視野の重なりが増え立体視が発達した。真猿類(ヒト、類人猿、旧世界ザル類、新世界ザル類)は網膜中央部に視細胞密度の極めて高いフォビアという部位が



赤い果実を採食するクモザル。左：通常の三色型の画像。右：二色型のシミュレーション画像。三色型では果実を葉との色味の違いで見いだせるが、二色型でも明るさの違いで見いだせる



ある。そこでは視神経ひとつ当りに中心投射する視細胞の数がひとつである。正面視野の解像度を大幅に上げたのである。そう、霊長類とは正面の一点を注視することに長けた動物なのである。こうして昼の世界の素早い樹上移動への適応に大きく舵を切ったのである。

霊長類の視覚のもうひとつの重要な改造が三色型色覚の獲得である。哺乳類に残された二種類の色覚オプシンのうちの一方はいわゆる青オプシンで、もう一方はいわゆる赤オプシンであった。大まかな言い方をすればこの赤オプシンから緑オプシンを産み出した。血液型のA、B、Oはひとつの遺伝子の三つの変異型（アリールという）だが、当初の赤オプシンと緑オプシンの関係もアリールとして始まった。この遺伝子はX染色体に乗っていたため、X染色体を二本もつメスにのみ三色型が実現した。それが中南米に生息する新世界ザルである。一方アフリカ・アジアに生息する旧世界霊長類（ヒト、類人猿、旧世界ザル類）では赤と緑のアリールを一本のX染色体上に並べ直した。これによりオスも三色型になった。霊長類は森林という色覚の強みが発揮できる環境のなかで三色型色覚を育み、他の哺乳類に抜きん出た訳であるが、それでも鳥などに一般的な四色型には遠くおよばない点に留意されたい。

霊長類の三色型色覚は成熟した緑葉の色調を異なる樹種間で識別することが極めて不得

手である。皆一様に「緑色」に見えるのだ。鳥・爬虫類ならこれらを明瞭に区別できる。しかし、森で生活するサルたちにとっては食べられる果実や若葉、そして仲間や敵対個体や捕食者を、成熟した木の葉のバックグラウンドから検出することが大事なのだ。それには木々の葉は一括りに「緑色」で果実や若葉や体色が「赤」や「黄色」として浮かび上がる、ほどほどに良い色覚が霊長類にとっては絶妙な適応なのである。

じつは二色型の方がよいこともある

わたしたちの研究チームは中米のコスタリカで新世界ザルであるオマキザルとクモザルの野生群の採食行動を観察した。個体のわかつている糞を集め、DNA分析をすることで、その個体のオプシンのアリールを知ることができた。二種類のアリールをもっているメスは三色型で、一種類しかないメスはオス同様に二色型とわかる。行動観察の結果は、予測に反して果実の間当たり摂食量において二色型個体は三色型個体と同等であった。果実と葉は色だけでなく明るさも違う。明るさの違いなら二色型でもわかるからであった。さらに、嗅覚も重要な役割を果たしていた。色調を周囲にカモフラージュさせている昆虫の採食効率をオマキザルで観察したところ、むしろ二色型の方が三色型より良かった。二色型は明るさや輪郭など色以外の情報により敏感であることが、カモフラージュを

見破るうえで役に立つのだ。これらからいえることは二色型も条件によっては三色型に採食効率において遜色がないということだ。さらに三〇年におよぶオマキザルの観察記録を調べてみると二色型と三色型の生存・繁殖率に有意な差は見られなかった。

なぜ旧世界霊長類でヒトにだけ色覚変異が？

（ヒトには「赤緑色盲」（二色型色覚）や「色弱」（変異三色型色覚）といった呼称で知られる色覚のバリエーションがある。赤あるいは緑オプシンの遺伝子の欠失により二色型が生じ、両オプシンのハイブリッド遺伝子によって変異三色型が生じる。これらは多数派の「正常三色型色覚」に対して「異常色覚」とされ、それほど希でない変異となっている。他の旧世界霊長類は正常三色型ばかりで変異はほとんど見られない。なぜヒトだけが？しかし、このように概観してくると、ヒトにみられる色覚の変異はネガティブなものではなく、意味があると積極的にとらえ直す根拠が見えてくる。霊長類の三色型色覚は森林の樹上生活への適応としては重要だが、カモフラージュを見破るには二色型の方が優れている。約二〇〇万年前から森林を離れ平原に進出し石器を使って狩猟をしてきた我々の祖先にとっては霊長類型三色型色覚の重要性は高くない、むしろ色覚に多様性があることが重要だったかもしれないのだ。

変わり三猿コレクション

中牧 弘允

吹田市立博物館館長／民博名誉教授

「見る、聞け、言え」三猿

民博には世界中から集めた三猿が二五〇点あまり収蔵されている。オランダ人のコレクションが発端となり、民博収集の資料のほかに国内のふたつのコレクションが加わった。大部分はふつうの「見ざる、聞かざる、言わざる」だが、「変わり三猿」とよばれるものも多少含まれている。それには二種類あり、「見る、聞け、言え」というタイプと、「見る、聞け、言うな」というものである。

前者の三猿は「逆さ三猿」ともよばれ、イタリアのチンパンジーは双眼鏡やラッパを手にしている。日本でも熊本県の木の葉猿のなかにそ



イタリアの三猿（置物）。「見る、聞け、言え」のタイプ。「さる」展で展示中。H0199948

三つの格言、三匹の猿

これを解くヒントはコレクションのなかにあった。とある手紙のなかに「見て、聞いて、口を慎めば、平和と安息がえられる」という文句があったのである。ホイド・ヘゼーレの名で。

ホイド・ヘゼーレはベルギーのフランドル地方の神父として、また詩人として一九世紀を生きた。理想主義、郷土愛にも燃えていたようである。上司の神父とぶつかり、ブリュージュの神学校の教師に転じている。ジャーナリストとしての才も発揮し、アメリカの詩人ヘンリー・ワーズワース・ロングフェローの翻訳でも名をはせた。たしかに「見る、聞け、言うな」の格言は一九世紀末のフランドル地方でヘゼーレがひろめた



ベルギーの三猿（壁掛け）。「見る、聞け、言うな」のタイプ。「さる」展で展示中。H0199923

ようだが、彼の独創ではない。なぜなら、一三〇〇年ごろのバリで同様の説教がなされ、一四世紀末のフランスのパラードにも詠われていたからである。

「平安に暮らしたいなら、見て、聞いて、口を慎むように」という格言はロンバルディヤといわれ、イタリア人に仮託されている。つまり、すくなくとも中世のラテン世界までは「見る、聞け、言うな」のルーツをさかのぼることができそうである。

最後に格言が三猿にどう結びついたかである。ヨーロッパに猿は棲息せず、動物園にいるチンパンジーがもつとも身近な存在である。日本の三猿像をみたとき、彼らがそのイメージをチンパンジーに重ねたことは容易に想像できる。そして地元の格言とチンパンジーが自然に結合したのではないかと考えられる。



今ではほとんどが観光用ラクダ。(聖カトリヌ修道院近くで撮影)



世話になっている部族長と彼のラクダ。むかしはラクダはステータスシンボルだった

エジプト・シナイ半島



ラクダに乗ってみました

写真：調査で初めて乗ったころのへっぴり腰姿。今はもっとうまく乗れる！

〇〇してみました世界のフィールド

「沙漠の船」の 乗り心地

西尾 哲夫 民博 民族社会研究部

ラクダは乾燥地域に暮らす人びとの生活に欠かせない家畜である。モータリゼーションが世界中を席卷したとしても、沙漠を行くための乗り物としてラクダは現役である。

最高にカッコいい登場シーン

茫漠とした果てしない地平線から黒づくめのペドウィンがあらわれ、リスミカルなラクダの足音とともに一直線にこちらに向かってくる……。映画「アラビアのロレンス」でペドウィンの若き族長を演じたエジプトの名優オマー・シャリフが、初めて画面にあらわれるシーンだ。この場面は、映画史上、最高にカッコいい登場シーンともいわれている。

現代のペドウィンが移動に使っているのは、ラクダではなくて大型の四輪駆動車だ。だが、沙漠での調査にラクダは欠かせない。シナイ半島を踏査したおりにも、ラクダに乗ってキャラバンさながらの毎日をすごした。沙漠をフィールドにしている言語学者は、オマー・シャリフと同じくらい上手にラクダに乗ることができるのだ。ただしそれは、ラクダを馬のように操ることができる、という意味ではない。

オマー・シャリフ登場シーンのラクダは走っているわけではない。このラクダはキャンター（駆け足）よりもゆったりとした歩様で動いている。馬術でいう「トロット（速歩）」だ。トロットをしている馬に初心者が乗るのはかなりつらい。馬が一步進むたびに反動で尻がはねあげられ、そのままドスンと鞍に落ちる。痔主だったら大変なことになる。馬のトロットでは、左（右）の前脚と右（左）の後脚が同時に前に出るため、背中が上下に動くからだ。騎手には、この上下動をうまく逃がすテクニックが要求される。一方、ラクダの場合だと、同じ側の前脚と後脚が同時に前に出る。つまり騎手に伝わるのは上下ではなく前後の揺れになる。というわけで、少し慣れればゆったりと歩くラクダに揺られて沙漠を旅するのは、それなりに楽だ。

「おれたちはみんなアラブ」

とはいえ調査には予想外のトラブルがつきものだ。シナイ半島の南にある港町トゥールからモーセが十戒をさすかたたとされる山の麓にある聖カトリヌ修道院に通じる古い巡礼路を探査していたときのこと。

巡礼路には涸れ谷のワーディ・ヘブラーンという難所がある。わたしたちは二〇頭ほどのラクダとラクダ引きをムゼイナ部族から借りていたのだが、ワーディ・ヘブラーンをしきっているのはアウラード・サイド部族だった。

ワーディ・ヘブラーンの入り口にさしかかると、案の定、アウラード・サイドの人びとが集まっている。ここは自分たちがしきっているから、自分たちからラクダとラクダ引きを調達するのが筋だという。もちろんムゼイナ部族も負けてはいない。双方が一步もゆずらず、丁々発止のやりとりが始まってしまった。

このまま日が暮れるのではないかと思いはじめたとき、同行していた発掘隊の親方が仲裁に入ってくれたのでワーディを通過することができた。親方の話を聞いていた同僚によると、親方はこう言っていたらしい。「自分は上

エジプト出身のよそのものだが、俺

たちはみんな同じアラブじゃないか。よそからやって来た日本人の前でみっともない口論はやめよう」。

ついでに書いておくと、慣れない人がアラビアのロレンスを気取って全速力で沙漠を駆けるのはやめた方がいいだろう。ラクダレースの様子を見てもわかるように、本気のラクダは競馬の馬と同じように宙を飛ぶような走り方をする。時速五〇キロは出るらしい。ちなみにわたしはラクダを走らせたことは一度もない。



サウジアラビアのリヤドで開催されたラクダレースで、ゴールインしたジョッキーに順位札が手渡されるところ (2003年12月17日、撮影・縄田浩志)

ゆったり東南アジア
春のみんなはくフォーラム2016
舞踊や音楽などのイベントを通して、ゆったりとした東南アジアの日常を体感してください。

◆みんなはく映画会 映画で知る東南アジア
現代の東南アジア社会がかかえる課題とそ

◆虹の兵士たち
日時 1月10日(日) 13時30分~16時30分
「消えた画 クメル・ルージュの真実」
日時 1月24日(日) 13時30分~16時

◆ワークシヨップ
「東南アジアの仮面と人形」
① 2月13日(土)(定員60名)
ドキュメンタリー映画で知るマレーシアの影
絵芝居の現在
講師 戸加里康子(拓殖大学 非常勤講師)

④ 2月21日(日)(定員20名)
インドネシアの仮面舞踊...
お話とワークシヨップ
講師 福岡まどか(大阪大学 准教授)
⑤ 2月27日(土)(定員40名)
ラオスの自然から生まれる
パフォーマンスとワークシヨップ
講師 あさめまちすこ(パントマイニスト)

満の方は保護者同伴で参加
◆みんなはくミュージアムパートナーズのワー
クシヨップ
「おりがみで遊ぼう!」干支シリーズ⑤「申」
日時 1月11日(月・祝)
11時/11時30分/13時/13時30分/
14時(各回30分程度)

ます。世界の文化の、奥深く、へこ一緒にど
うぞ。
時間 13時~14時30分
会場 あべのハルクス近鉄本店「スペース9」
※要事前申込(参加状況により当日受付あり)、
参加費各回1,000円(定員各回50名)



影絵人形から、あやつり人形、棒人形、そして水の中であやつる人形まで、東南アジアには多くの魅力的な人形芝居がみられます。みんなはく東南アジア展示場に展示された人形を中心に、人形をもちいた芸能の魅力を紹介します。

みんなはくワークショップ

時間 14時30分~15時30分
※申込不要、参加無料(要展示観覧券)
本館の研究者が来館された皆様の前に登場します!

1月10日(日) 本館第3セミナー室、11時~12時
バリ島の仮面作りと職人—命をふきこむ技と折り話者 吉田ゆかり(本館外来研究員)
1月17日(日) 本館第3セミナー室
画像データベースで見る「字ぶ」近代日本の身装文化

休館日、無料観覧日のお知らせ
1月4日(月)まで休館します。1月11日(月・祝)成人の日
『コリアン社会の変貌と越境』
臨川書店 2,000円(税抜)

友の会
友の会講演会(大阪)
会場 本館第5セミナー室(定員96名)
※当日先着順、会員無料(会員証提示)、一般500円

友の会講演会(大阪)
会場 本館第5セミナー室(定員96名)
※当日先着順、会員無料(会員証提示)、一般500円
第450回 1月9日(土) 14時~16時
イスラーム化と向き合う先住民
新東南アジア展示から読みとく



通称「バナナ裁判所」で購入され運び出される



バナナを運ぶ仲買人の女性



店で出されるムトリ。小麦粉でできたチャバティと一緒に食べるとお腹いっぱいになる

味の根っこ

タンザニアのバナナのスープ ムトリ

みぞうち よしゆき 溝内 克之 NPO 法人アフリック・アフリカ

都市の朝食ムトリ

アフリカ大陸の東部に位置するタンザニア連合共和国は、二〇〇〇年以降、外国からの投資、資源開発などを背景として急速な経済成長を経験している。仕事を求めて人びとは大都市へと移動し、都市人口は急激に増加している。経済成長の結果なのか車を購入する人びとが増え、おり、首座都市ダルエスサラムでは車の渋滞が大きな問題となっている。

早朝、街中を歩くと、つらい通勤ラッシュを乗り越え、仕事前に街角の食堂や露店で朝食をとる人びとをみることが出来る。砂糖たっぷりのミルクティー、煮込んだ豆、臍物スープ、肉の串焼き、揚げパンといった多様なメニューが提供されている。バナナのスープ、ムトリも朝の定番メニューのひとつだ。

ムトリには未熟で甘みのでていない緑色のバナナが使われる。牛肉と野菜（ピーマン、人参など）を煮込んで作ったスープに、短冊状に切ったバナナを入れ、ムトリ専用のかきませ棒キベケチヨでつぶしながらトロトロになるまで煮ていく。固形のスープの素を入れる店もあるが、基本は塩で味を調える。ポタージュほどのとろみになればできあがりだ。器にはライム、生唐辛子、塩が添えられており、お客はそれぞれの好みの味に仕上げる。味は、ジャガイモのポタージュに似ており、食感は滑らかだ。シンブルな味付けで飽きのこない料理だ。牛肉も入っており、仕事前に活力をつけてくれる。タンザニア

故郷の味バナナ

キリマンジャロの腹に換金作物のコーヒー、そしてバナナが繁茂するチャガ人の村々がある。バナナはチャガ人の主食だ。煮込み料理、豆とともに煮てマッシュポテト状にした料理、素揚げ、焼いたものなど多様なバナナ料理がある。酒もバナナで造られる。わたしの調査村の人びとはバナナを二〇以上の品種に分類しており、それぞれのバナナに適した調理法があるという。近年、バナナは自家消費のみならず、村の世帯に現金をもたらす重要な作物と認識されている。一九九四年の流通の自由化以降、コーヒー生産は低迷傾向にあり、村の世帯の主要な収入源ではなくなっている。生産に手間と費用がかかり、価格変動が激しいコーヒー栽培を辞め、都市向け販売用のバナナばかりを畑に植える世帯も出現している。都市への販路は確立されており、都市でのバナナの需要が増えたこともあるのか、買付商人へと転身する村人も少なくない。

村と都市を繋ぐバナナ

商人たちによって村で買い取られたバナナは、夕方、トラックに積み込まれキリマンジャロを出発する。そして深夜にダルエスサラム郊外の卸市場、通称「バナナ裁判所」にたどり着く。キリマジャロ、タンザニア西部のムベヤ、中央部モロゴロなど産地ごとに並べられて「判決」を待つ。夜明け前から料理人、露店の野菜売りなどがやってきてパンチ（房）ごと買って



朝食を提供するバー

で生活したことのある日本人にもムトリ好きの人は多い。日本で販売すれば人気が出る味かもしれない。

ムトリは、タンザニア北部キリマンジャロ山間部を故郷とするチャガ人の料理だ。チャガ人は、村での農地不足を背景に、故郷を離れ、都市へと積極的に移動する人びととしてよく知られている。政府や民間企業の職員、企業経営者から露天商まで多様な社会・経済階層で活躍している。バーや食堂の経営者や料理人も多く、彼らが自身の店でムトリを提供し始めたことで、故郷の味が都市へと広がったのだろう。

いく。仲買商人によると、「キリマンジャロのバナナを買っていくのはチャガ人ばかり」だという。故郷の味を再現するために料理人たちはキリマンジャロのバナナを買っていくのだろうか。そしてチャガ人たちは、故郷に思いを馳せながら渋滞で疲れた体をムトリで癒し、都市に生き、故郷の村を支えるために仕事や商売へと向かっていくのだろうか。これはキリマンジャロの村を第二の故郷だと感じているわたしのノスタルジックな想像かもしれない。

ムトリ (4,5人分)	
青いバナナ(料理用) 8~10本 ※バナナのサイズによる。またお好みのスープのとろみ具合に合わせて調整	① バナナの皮に包丁で切り込みをいれ、皮を剥き、果実の表面を薄くそぎ落とす。短冊状に切り10分ほど水にさらしてあくを抜く。
牛肉(骨付き) 200~300g ※しっかりと味をつけたい場合は固形の牛スープの素を追加	② タマネギ/人参などお好みの野菜をみじん切りにしておく。牛肉をひと口大に切る。
タマネギ/人参/ピーマンなどお好みの野菜 各1~2個(みじん切り)	③ 牛肉と野菜を水から煮込み、スープを作る。
ニンニク 1片(みじん切り)	④ 別の鍋にスープを半分うつし、バナナを煮込む。
水 5カップ(1000ml)	⑤ バナナをつぶしながら、残りの牛肉スープを入れ、塩で味を調えながら、好みのとろみに仕上げている。ポタージュスープ程度のとろみが適当。
塩 少々	⑥ 器にうつし、輪切りにした生唐辛子、切ったライム、塩を添えてできあがり。
生唐辛子/ライム (もしくはレモン) お好みの量	

「聖地」と「遺跡」のあいだ

— ブッダガヤーにおける寺院管理

まえじまのりこ
前島 訓子 民博 外来研究員

仏教の発祥地であるインドのブッダガヤーが世界遺産に登録された。それはブッダガヤーのあり方をめぐる争点の決着なのか、それともあらたなはじまりなのか。



仏教最大の聖地

ブッダガヤー（インド・ビハール州南部）は仏教創始者であるブッダが悟りを開いた地として知られる。現地には五〇メートルを超える大塔（Mahabodhi Temple）が佇んでおり、二〇〇二年に世界遺産として登録された。遺産登録の意義は、遺跡の有する人類にとっての普遍的価値を損なうことなく、後世に継承していくという点にある。ところが、同地域の遺跡の意義はそれだけに止

まらない。その場所は現に仏教最大の聖地であり、世界遺産登録に込められる歴史的意義とは別に宗教的な意義をもち合わせているからだ。それゆえ、遺跡のあり方に関しては、その歴史的な意義と信仰上の意義をいかに調和させ両立させられるのかが争点となっている。

「聖地」か「遺跡」か

たとえば、この地を訪れた人なら誰もが、大塔の周囲において白色の大理石の巡礼路が整備

されていることに気が付くだろう。この道は、ネパール人仏教徒の奇進によって、一九八〇年代に敷設された。大理石の敷設は、考古調査局によって寺院の真正性や遺跡の聖性を減退させるとして問題視された。だが、結果的に、大理石敷設の中止には至らず、仏教帰依者の要望を受け入れる形となった。



大塔周囲に設置されたチベット仏教徒の祭壇

巡礼路が整備されると、今度は大塔の可否が争点となった。大塔管理敷地内への土足での入場は法律上禁じられてお

り、また聖域への土足規制は決して特別なことではない。だが、一九九〇年代、伝統的にこうし

た習慣のないチベット人仏教徒が土足で遺跡に詣りたため、当時の管理委員会関係者とのあいだでトラブルになった。警察が出勤し、一〇人もの仏教徒がとらえられた。地元住民が仏教徒の釈放を求めて抗議し、地域を巻き込む事態に発展した。この事件を受けて、管理委員会は、土足禁止を徹底的に実施するのではなく、土足許可エリアの修正を図った。そして、二〇〇八年には、管理委員会が土足での寺院入場の禁止を解除する決定を下したとの報道があった。この決定は、冬場は早朝の気温が



大塔に参詣する仏教巡礼者

二〜四度と低く道が冷え、夏場は気温が高く道が高温になることから、土足の許可を求めている参詣者に配慮した対応であった。だが、この決定には異論もあった。仏教徒のなかには、聖域への土足での入場を反対する

者もおり、彼らはこの決定を抗議し、違反した場合は罰金を科すよう要求するなど、異議を申し立てた。その後、寺院管理地内への土足での入場は再び禁止されており、管理委員会の決定は「一時的なものにとどまった。いずれにせよ、土足可否をめぐる事例は、多かれ少なかれ信仰の



大理石が敷設された参道。写真正面で確認できるのは参詣者が触れないように周囲を囲われた菩提樹。この樹は、ブッダが悟りを開いた当時の樹のDNAを受け継ぐとい

要素が遺跡のあり方に影響をおよぼしていることを示している。

「ブッダガヤー」の行方

遺跡の保存・保護の観点からすれば、できる限り遺跡への接触を制限する方法が考えられる。しかし、いずれの事例においてもその選択肢ははたされず、もちろん、その可能性がなかったわけではない。同地域の遺跡管理を、管理委員会（一九五三年以来、ブッダガヤーの遺跡を管理する専門機関）から、考古調査局に移譲する提案があった。だが、管理委員会は、遺跡が単

なる遺跡ではなく現に生きてい

る寺院であり、考古学的意義以上宗教的な意味が込められている場所だとして、当の提案を受け入れなかったのだ。とはいえ、世界遺産登録以降、遺跡管理は、管理委員会による管理だけでは完結しなくなっている。管理委員会は、考古調査局との連携を図り、遺跡の保存・保護を強化しつつある。しかしながら、信仰上の差異はいろいろなおよばず文化的、社会的背景を異にする参詣者の数が増すなか、遺跡のあり方が思わぬ緊張の火種となる可能性は常に存在する。同地域の遺跡が宗教的に生きてい

る（生きられる）場所であればこそ、こうした緊張の可能性は避けられないだろう。要するに、「世界遺産登録」は、「ブッダガヤーはどうあるべきか」という問題の決着ではない。むしろ、今後その行方が問われるあらたな争点の始まりなのである。



世界遺産に登録された大塔 (Mahabodhi Temple)

ジェンダーを超える踊り

—ナルタキ・ナタラージ

演者はパフォーマンスの場で、何を内在化し、体现するのか。男女の世界を往来し、超越する神々の世界の踊りのなかで、南インドの古典舞踊家が見出したのは自分自身であった。



チェンナイで公演するナルタキ・ナタラージ (2014年)

南インド・タミルナードウ州で形成されたバラタナティヤムは、インドを代表する古典舞踊ジャンルのひとつである。中心地であるチェンナイ(旧マドラス)市はもとより、インド各地で人気があるほか、国外の南アジア系コミュニティでも盛んに演じられている。この南インド古典舞踊界で今もつとも注目を集めているアーティストの一人が、ナルタキ・ナタラージである。伝統に根ざした踊りを忠実に伝える舞踊家として高く評価されている一方で、トランスジェンダーとして初めて成功を収めた古典舞踊家である点も注目されている。

混乱の日々と救い

ナルタキは、タミルナードウ州の古都マドウライに男性として生を受けた。小さいころから、自分が他の男の子たちと違うことに気がついていったという。女性という方が居心地よく、母親のサリーをまもって踊るのが好きだった。女の子のような行動を両親や親族から咎められ、自分の性について混乱する日々が続いた。

マドウライは、女神ミーナークシの寺院が

あることで有名である。境内にあった女神の石像にナルタキは目を奪われた。乳房が三つあったからだ。ミーナークシは幼いとき男の子のように振る舞っていたが、シヴァ神に恋したとき、第三の乳房が消え女神となったという話を祖母から聞き、自分の性と重ね合わせた。自分のような神さまがいることで救われた思いがした。

五歳になったころ、村の広場で一人遊んでいるナルタキに、そと近づいて肩を叩いたのがシャクティだった。シャクティの目を見て、自分と同じ境遇にいたことがすぐにわかったという。ナルタキは、そのとき初めて自分の踊りを披露した。シャクティは最初の観客だった。その後、二人はいつも行動をともにするようになる。映画で活躍していた舞踊家に憧れ、彼女たちの踊りを真似た。学校で踊りを披露し賞までもらったが、家人には隠さなければならなかった。

次第に、家族からの侮蔑や圧迫に耐えられなくなり、一二歳になるとシャクティと



ナルタキの盟友、シャクティ・バスカル

一緒に家を出た。路上演劇集団に入ったが、極貧生活を余儀なくされた。高位カーーストの裕福な家庭で育った二人には辛い日々だったが、シャクティはナルタキの才能を信じ、我慢して精進すればきっと立派な舞踊家になれると励まし続けた。

居場所としての舞踊

ナルタキの踊りは人気があったが、まったくの自己流だった。一八歳になったころ、小さいときから憧れていた舞踊家の師匠が雑誌で紹介されているのを見つけると、居ても立ってもいられず、翌日には彼の家の門を叩いた。粘り強く懇願し、一年後に師匠の家に住み込みで舞踊を習うことを許された。学び始めるやいなや、探していた自分の居場所や生きがいを見つけたと感じ、その後一五年間にわたって踊りを学ぶことだけに没頭した。師匠が住み込みを許したのは、ナルタキの資質を認めたからだだったが、それと同時にトランスジェンダーである二人を社会の無知や中傷から守るためでもあった。その恩を二人は決して忘れない。

ナルタキは、神の世界を表現する古典舞踊を通して、自分を発見したという。バラタナティヤムは、寺院における奉納舞踊を起源としている。ジェンダーを超越する絶対的存在との合一を願う人間の姿が、男女間の情感(献身、ロマンス、エロティシズム)に置き換えられて表現される。多様な性の在り方を内包する神々の世界を演じることは、ナ



民博の研究公演「時を超える南インドの踊り」で熱演するナルタキ (2015年)

タルタキにとって単なる比喩ではなく、自分の存在とわがちがたく繋がっている。

師匠が一九九九年に亡くなると、二人は意を決して舞踊の中心地チェンナイに移り住んだ。古典舞踊界の保守層からは中傷も受けたが、ナルタキの才能は徐々に評価されるようになった。数多くの賞を受賞し、毎年海外公演をおこなうほど活動の幅も広がった。ナルタキは、トランスジェンダーであることを前面に出して舞踊活動をしており、彼女の舞踊界での成功は、性の多様性に関する意識を高めるのに一役買っている。

「〇〇ケア」とか「ケア△△」ということだが、日常のさまざまな場面に溢^{あふ}れている。ヘアケアやスキンケアを謳^{うた}った美容商品。健康ブームに乗って人気を高めているヘルスケア。福祉や看護の現場で耳にするデイケアやケアワーカー。ケアというこ
とばを、わたしたちはごく普通に用いているが、そもそも「ケア」とはなんであろうか。

英語の「ケア (care)」は、悲嘆や病床を意味する古英語やゴート語の *caran* に由来する。この語に前置詞の *for* が付け加わることで、何かしたいと気持ち (配慮) を意味するようになり、一四世紀になると保護の意味で用いられるようになった。欧米の思想や人間観のなかで、他者への深い思いやりや道徳的な関係を築く、倫理としてのケアが発展してきた。そして今日では、ケアは「caring for (世話する)」と「caring about (配慮する)」の意味が重なったコンテクストで用いられている。「世話」に注目すれば身体的・物理的な側面を、「配慮」に焦点を当てれば精神的側面を強調することになる。そうしたなかで「自己」へのケア」という用例まで登場してきたのだ。

他方、日本において「ケア」というカタカナことはが使われはじめたのは最近になってからだ。日本語にはもともと、育児 (子どものケア)、介護 (高齢者のケア)、介助 (障害者のケア)、看護 (傷病人のケア) といった用語がある。それらが総して「ケア」とよばれるようになった背景には、九〇年代以降の日本における介護福祉の導入がある。それは、日本における核家族

生き方を問う

人間学の キーワード

ケア Care

とだ みかこ 民博 機関研究員
戸田美佳子

化と経済成長を背景に、ケアが労働として市場で調達・選択されるようになり、社会化されていった過程といえる。「ケアの社会化」によって、身内でない人に、自分の、あるいは身内のケアを委ねることが可能になってきた。日本において「ケア」という新しい用語の登場は、これまで家庭といった私的な領域で担われていたために、社会のなかで存在しなかった問いを浮び上がらせ、それまで誰もが「問題」と思わなかったものを社会問題化する効果をもっていた。そうした意味では、ケアは人間愛にもとづき自然に発生する現象というよりは、歴史的な構築物だといえる。さらには、ケアにはつねに倫理的な負荷がかかり、無条件に「よきもの」とみなされてきた傾向があると、社会学者の上野千鶴子^{ちづこ}は指摘する。ケアがじつは、「できれば避けたいやつかいな重荷」であるにもかかわらず、ケアということばにはそれを「解毒」する作用があるという。

超高齢社会を迎えた日本は、誰もが他者と支えあわなければならぬ。「ケア社会」へと突入した。ケアは今や社会問題だ。ケアの現場には受け手と担い手とのあいだに立場の入れ変わりが難しい、非対称な関係も内在する。このようなデリケートな側面があるため、その議論にはしばしばある種の息苦しさともなったままだ。こうした状況に風穴を開け、ケアされるものとケアするものが双方向的な関係を築くにはどうしたらいいのか。「ケア」とは何かを語ることは、とりもなおさず、これからのわたしたちの生き方を問うことでもあるのだ。

編集後記

大阪はミナミのアメリカ村でサルが捕獲されたというニュースを見た。珍しいペットが逃げたのかと思いきや、野生のサルらしい。みんぱくのある大阪府の北摂地域でサルが出没したというのであれば、まあ山も近いし、さほど驚かないが、はるばるミナミの繁華街まで、いったいどうやって辿りついたのだろうか？ 箕面の滝を仮に出発点とすると、ほぼ真南に人間の足で下ること5時間弱でアメリカ村に着く。サルの足でも不可能ではないが、途中で見つかってしまいそうなものだ。トラックの積荷に紛れ込んでいたのだろうか？ アマゾンの吹き矢猟師さながらに、麻酔薬入りの吹き矢でサルを射止めることができる市の職員が大阪にいる、ということもさらに驚きである。

2004-5年のとり展に始まり、毎年恒例になったみんぱくの年末年始展示も、「さる」でついに干支を一巡したことになる。この干支展は、普段は展示にかかわらないみんぱくの職員が企画に加わる研修の機会でもあるのだが、チラシのデザインやキャッチコピー（「さる、時々ひと、ところにより神」）の完成度もなかなか。関連イベントも盛りだくさんである。

年末年始は、ぜひみんぱくへ。

(山中由里子)

- 表紙：三猿の土人形 地域：日本
見ざる (H0107847)、聞かざる (H0107848)、言わざる (H0107846)
- p2の三猿(置物) 地域：オーストリア H0199984
すべて「さる」展にて展示中。

次号の予告

特集

「夷酋列像」を読み解く

みんぱくをもっと楽しみたい 人のために—会員制度のご案内

国立民族学博物館友の会

本館展示の無料入館や特別展示の観覧料割引に比べ、『月刊みんぱく』や会員機関誌『季刊民族学』などの定期刊行物や、毎月の友の会講演会、セミナーなどを通して多様な文化の情報を提供しています。

みんぱくフリーパス

1年間、本館展示へ何度でも無料で入館いただけます(特別展示は観覧料割引)。他にも、みんぱくを楽しむための特典がいっぱいです。

国立民族学博物館キャンパスメンバーズ

みんぱくと大学等教育機関との連携を図り、文化人類学、民族学にふれる学びの場を提供することを目的とした会員制度です。

詳細については、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
(電話06-6877-8893 / 平日9:00 ~ 17:00)

月刊みんぱく 2016年1月号

第40巻第1号通巻第460号 2016年1月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
電話 06-6876-2151

発行人 池谷和信
編集委員 山中由里子(編集長) 河合洋尚 菅瀬晶子
丹羽典生 丸川雄三 南真木人 吉岡乾
デザイン 宮谷一 長岡綾子
制作・協力 一般財団法人千里文化財団
印刷 能登印刷株式会社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。
*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
- 乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。

みんぱくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

みんぱくフェイスブック

<http://www.facebook.com/MINPAKU.official/>

みんぱくツイッター

<http://twitter.com/MINPAKUofficial>



みんなのほくぶつかん みんぱく

MINPAKU

さる展の、見えざる側面

年末年始展示イベント「さる」

1月26日（火）まで、本館展示場ナビひろばにて開催中

恒例の年末年始展示イベント「さる」展が開催中です。今年の干支「さる」にまつわるみんなぱくの資料を、「さるになるひと」「かみになるさる」「ひとになるさる」の3つのキーワードで紹介します。毎年恒例となったこのイベントは、みんなぱくの教職員の展示活動研修会としての側面ももっています。資料の構成や選択、写真パネルの撮影、展示作業、広報チラシの作成などをおして、博物館の活動をより深く理解することを目的としています。

「部署を越えているいろいろな人と作業ができたことが、いい経験になりました」と語るのは、研修に参加した広報係の細木由美さん。さるが何かを担っている姿が気になって、滋賀の大江絵の絵馬を展示資料に選びました。



展示作業中の細木さん。「お客様の動線や目線を意識しながら、資料の向きや角度を調整して置いていきました」とのこと

いちばん思い出深いのは、デザインにも携わったチラシづくり。3つのキーワードをあらわすいいキャッチコピーがなかなか浮かばず、難航したそう。最後の最後で、メンバーの一人がふと発した「さる、時々ひと ところにより、神」という一言が、決め手となりました。

会期中にはトークイベントやワークショップなども開かれますので、新年はぜひみんなぱくでお過ごしください。